



# ぶらり文学 散歩

明治40年秋－石川啄木の札幌を歩く

案内人

## 新聞記者・石川啄木の絶賛した札幌

天才歌人・石川啄木（明治19＝1886年～明治45＝1912年、享年26）は明治40（1907）年5月、故郷・岩手を離れ、北海道に渡ってきた。

最初に訪れた函館で大火に見舞われたため、新聞記者の職を求め、9月14日、初めて札幌の地を踏む。「美しき北の都」「しめやかな恋のありそうな郷」「詩人の住むべき都会」として札幌を絶賛した啄木だったが、実際にはわずか2週間の滞在で、9月27日には札幌を離れてしまう。

啄木の北海道流浪は小樽、釧路へと明治41年4月まで続いた。社会への関心を開眼させた北海道生活の中で、最も短いながらも凝縮した時間であった「明治40年秋」の啄木の札幌の日々をあらためて現地を歩き、追体験する。

## 石川啄木の北海道放浪期間

1907年（明治40年）5月5日～

1908年（明治41年）4月5日

コース：

大通西3丁目～札幌駅～北7条西4丁目



# 明治 40 年の札幌市街図

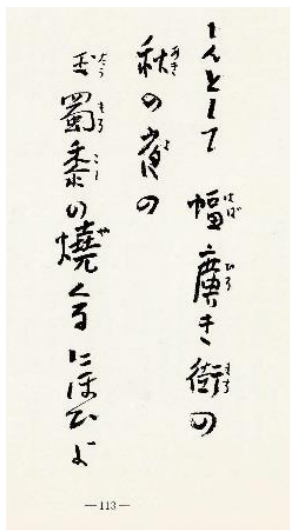


明治 40 年 8 月 10 日 富貴堂書房発行の地図をもとに、各種石川啄木関連地図を参照して作成。

## 石川啄木の札幌をめぐる

### ▼石川啄木文学碑（大通公園・西3）

1981年9月14日（啄木来札から74年目）に「石川啄木記念像設立期成会」により建立。ブロンズ彫刻は坂坦道作。「しんとして幅廣き街の／秋の夜の／玉蜀黍の焼くるにほひよ」の歌は中野北溟・書。除幕式では川越守作曲による「さつぽろ啄木の歌」がたくぎん銀声会により披露された。



### ▼北海道タイムス（大通西4）

札幌の有力紙として「北海新聞」が1887年、大通西3に誕生。同紙は「北海道毎日新聞」と改題後、1901年「北門新報」「北海時事」と合併し「北海道タイムス」となった。本社は北門新報のあった南大通西4丁目だった。その後、西3丁目に移る。

石川啄木はなんども同社へ入ることを希望したが、果たせなかった。

「ある日、雨情から「友人の石川という男をタイムスに採用してくれまいか」と頼まれた記憶もあるが、これが啄木である。（中略）会見の場所は米風亭ということにして、約束の日時に出かけると、すでに野口は石川と思われる青年と二人で

二階の座敷で私の来るのを待っていた。（中略）彼がもしタイムス社に入社していたとしたら、おそらくは、平凡な一地方新聞者で終ったかも知れない。」

（山口政民「採用されなかった啄木」）

北海道タイムス 東武、阿部宇之八両氏の理事として経営する処、新進俊才の記者を集め、輪転印刷機を以て、数万部の読者を有し、無休刊の大新聞、東京に支局を置き中央主府の報道に怠らず、全道各地に支社出張所を置き、勢力愈加わり牢乎として基礎益々堅く、本道唯一の新聞紙たり（大通西四丁目電話一六四番）

北門新報 村上祐氏を戴きて上野寛一氏編輯に長たり。本紙一度び再興せらるるや、議論の侃々と痛快とを以て読者の歡迎頗る深大なりしも、至難の事業は支障相次で起り、経営意の如くならざるものなり、休刊以来既に四ヶ月に亘りて、未だ此好新聞に接するを得ざるは残懐の事なりとす（「札幌便覧」1908）

### ▼米風亭（南1西2）

米風亭は現在の米風亭（南3西1）とは別。明治三十九年（一九〇六年）に岩井徳松が開業した評判の西洋料理店。

●米風亭 丸吉洋食店と対して、斯界一方の王たらんものを即ち米風亭となす、店主は多年米国に在りて厨房界に研鑽苦心の人たりしを以て、其美味と配味の妙は所謂是れ群を抜くものにして、開業日未だ浅しと雖も、眷顧頗る深しと云う（「札幌便覧」）

### ▼北鳴新報社（北1西2）

詳細不明。北1条西2丁目にあった。社長は伊藤山華。新聞は出たりに出なかつたりだった。雨情は編集長格であった。



■野口雨情（のぐち・うじょう、1882〜1945）詩人。本名英吉。茨城県生れ。東京専門学校中退。大正中期の民謡・童謡興隆の機運の中で、職を転々と変えながら、素朴な田園的情趣を主体とした作品を多く発表。北原白秋や西条八十の都会的風趣と対照された。民謡「船頭小唄」「波浮の港」や童謡「十五夜お月さん」「青い目の人形」などは広く愛唱された。1907年5月北海道に渡り北鳴新報社に入社。9月23日、石川啄木を知り、ともに小樽日報社に入社。翌年5月北海道タイムス社、1909年6月胆振新報社に転じ、同年末郷里に帰った。

#### ▼北門新報社（北4西2）

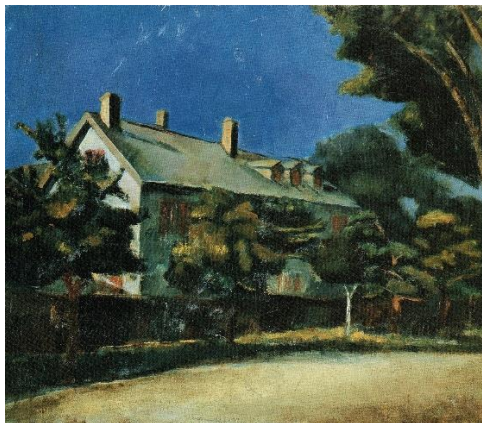
「北門新報」は1891年、小樽で青年実業家金子元三郎により発刊。土佐出身の自由民権論者の中江兆民を主筆として迎えている。創刊翌年5月、札幌大火で北海道毎日新聞が類焼したすきに、南大通西4丁目に小樽から本社を移転させた。合併で同紙はなくなったが、同名の新聞がいくつも現れた。啄木が勤めた北門新報は1906年創刊の第4次で、住所は北4条西2丁目1番地。東急デパート北口付近。

◎札幌には新聞が三つ。第一は北海タイムス、第二は北門新報、第三は野口君の居られた北鳴新聞。発行部数は、タイムスは一万以上、北門は六千、北鳴は八九百（？）といふ噂であったが、予は北門の校正子として住込んだのだ。当時野口君の新聞は休刊中であつた。》（石川啄木「悲しき思出 野口雨情君の北海道時代」）

#### ▼札幌北星女学校（北4西1）

1887年サラ・C・スミスにより開設（北1西6）。1894年北星女学校に名称変更し、北4西1に移転した。聖書・英文・家政専攻

科。1929年に南5西17に移転。



→北4西1に移転した頃の校舎。下は久保守「札幌北星女学校（1923―24）」

#### ▼五号館（北4西3）

1899年に種苗・農機具の販売業であった札幌興農園が北4西3に横浜の外国人居留地の洋館を模した赤れんが造り、2階建ての店舗を開設した。1906年には五番館として北海道内で最初の百貨店となる。2009年9月、後継店となっていた札幌西武閉店。

#### ▼北海道庁（北3西5）

■向井夷希微（むかい・いきび、1881〜1944）青森県生まれ。本名・永太郎。父は会津藩士。生後間もなく母方の祖父母にひきとられて北海道に渡り、別

海、根室、網走で育つ。のち母方の伯父の養子となり鹿児島へ。キリスト教の洗礼を受け、鹿児島造士館中学を経て第一高等学校中退。1902年根室の花咲小学校代用教員となり、この頃から詩作を始め「文庫」「新声」などに投稿。1903年函館の北海道鉄道会社に転じ、英語の私塾を営む。飯田白圃（房吉）らと同人詩誌「牧笛」発行。宮崎郁雨、石川啄木らの「紅首着」にもかかわる。1907年北海道庁拓殖部林務係に転じ、札幌、函館に勤務したのち上京した。なお、向井豊昭（1933〜2008）は孫。岡和田晃『向井豊昭の闘争 異種混交性（ハイブリディティ）の世界文学』がある。

九月十四日 土

午前四時小樽着、下車して姉が家に入り、十一時半再び車中の人となりて北進せり、銭函にいたる間の海岸いと興多し、銭函をすぎてより汽車漸やく石狩の原野に入り一望郊野立木を交せて風色新たなり。時に稲田の穂波を見て興がりぬ。

午後一時数分札幌停車場に着、向井松岡二君に迎へられ向井君の宿（北七条西四ノ四田中方）にいたる、（石川啄木「明治四十丁末（ていびひのとひつじ）歳日記」）

### ▼札幌停車場（北5西3）

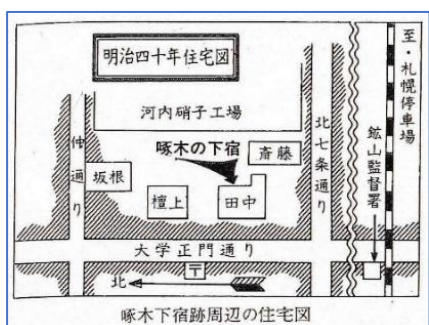
改札口から広場に出ると、私は一寸立停つて見たい様に思った。道幅の莫迦に広い停車場通りの、両側のアカシヤの街樾（なみき）は、蕭条たる秋の雨に遠く／＼煙つてゐる。其下を往来する人の歩みは皆静かだ。男も女もしめやかな恋を抱いて歩いてる様に見える。蛇目の傘をさした若い女の紫の袴が、その周囲の風物としつくり調和してみた。傘をさす程の雨でもなかつた。

『この達は僕等がアカシヤ街と呼ぶのだ。彼処に大きい煉瓦造りが見える。あれは五号館といふのだ。……奈何だ、気に入らないかね？』

『好い！ 何時までも任んでゐたい——』  
実際私は然う思った。

（石川啄木 小説「札幌」）

### ▼啄木の札幌の下宿（北7西4）

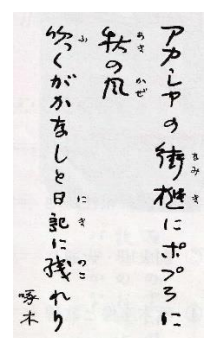


→上・地図は好川之範「啄木の札幌放浪」より。葛西茂雄作の啄木像。坂垣道氏の指導によるもので、1976年に北区ロビーに展示された。

田中ヒサは1889年生まれで啄木より3歳下。1907年北星女学校卒業。啄木がその秋にヒサのいる家に下宿した。ある日は田中サト、妹に英子がいた。姉の久子は『丸顔で色白、少々やぶにらみ気味であるのと片頬にできるえくぼが「人好きのする表情」を作り出していた。時々「絶え絶えな声」で賛美歌を歌った。／＼あるとき、机の上の瓶にさした花の名前を啄木に聞かれて、彼女はスイートピーと答えたが、そのとき「耳の根を仄のり紅くしているのを、啄木は見逃さなかつた」

（山下多恵子『Wergis mein nicht 忘れな草 啄木の女性たち』より）

▼啄木文学碑・借楽園緑地（北7西7）啄木没後100年記念。2012年9月15日に「札幌に啄木の歌碑を建てる会」による。



歌碑の4か国翻訳文

Through the rows of acacias, and poplars  
autumn winds blow  
What sadness—remains in my diary

洋槐林荫白杨树  
秋风吹过人心怡  
此景此意留日记

아까시나무 가로수에 포플라에  
가을바람이  
얼어 애틀하나니 일기에 남겼고나

Ворошиг топола,  
Шуршиг  
В аллеях акаций  
Осенний ветер...  
Зазпись в моем дневнике

«По алле из деревьев акаций, в тополях  
Осенний ветер  
Подует - и тоскливо», - осталось в дневнике...

- 【札幌のほかのモニュメント】
- 札幌林檎園歌碑 平岸の天神山に「石狩の都の外の君が家林檎の花の散りてやあらむ」の歌が刻まれている。リンゴの縁のみ。
  - 橘智恵子の生家（東区北11東12）
  - 札幌村郷土資料館（東区北13東16）橘智恵子の手紙・学籍簿

## 石川啄木「随筆・秋風記」（一九〇七）より

小引

明治四十年八月二十五日夜の函館大火は驚くべき惨劇を演出して一時殆ど区の生命を絶てり。予当時弥生尋常小学校に代用教員たり薄給僅かに十二金遂に一家数人の口を糊すべからず。乃ち函館日々新聞の招に応じ未だ校を辞せざるに暑中休暇を幸とし入りて同社に遊軍たり給十五金の約成る。生れて初めて新聞記者となり僅かに八日を経。火起りて社先づ焼け学校亦烏有に帰す。社は容易に立つ能はざるもの如く学校亦無資格者淘汰の噂頻りなり。九月に入り札幌に在る詞友夷希微向井永太郎君より飛電あり来りて北門新報社に入れ月十五金を給せむと。乃ち其月十三日夕星黒き焼跡に名残を惜みて秋風一路北に向ひ翌十四日札幌に着き向井君の宿なる北七条西四丁目四、田中方に仮寓を定む。翌日初めて露堂小国善平君に逢ふ。君は予と同県宮古の人今北門の硬派記者たり予を同社に推薦したるは此人なり。十六日より出社し伊藤和光君と共に宿直室にありて校正の事に従ふ。『秋風記』は乃ち此哀れなる校正子が入社の際に接し悲風千里より来るの感あり弔後数日畏友梁川綱島栄一郎氏の計に接し悲風千里より来るの感あり弔文を草して余白を借る。連載三日而して其最後の日乃ち二十七日は実に予が小樽日報の創業に参加するの約已に成りたる時にして同日夕予は愴惶行李を整へて小樽に向へりし也。滞在僅々二週日のみ。丁未の秋静かなる札幌の夢は茲に名残を此二篇に留む。

於小樽花園町

啄木識

## 秋風記

◎遂に予は放浪の民なり、コスモポリタンの徒なり、天が下家なき児なり。今年五月の初め、一人みちのくの花を後にして潮速き津軽の海を渡り、巴港湾頭に居をトしてより僅かに百二十有余日、朝に大森の浜の濤声を友とし、夕**碧血碑**畔の暮風に嘯けども、身世の勿劇徒らに苦思を醸すこと多く、胸裡深く瓢泊の愁を蔵しては又心頭白雲を浮べ、肘を曲げて石上に眠るの閑なし。焉んぞ秀句一絶陶として世を忘るるの興あらむや。友白村よく飲み白鯨よく歌ふ、相共に携へて高頭笑傲し、漫に世事を罵りて以て僅かに悶を遣りき。八月二十五日の夜、火帝東風に乗じ、其威あたるべからず、紅舌立所に万戸を甜め尽して熱風海波を沸かし、須臾にして函館の全市殆んど烏有に帰し了んぬ。予一人心に快哉を絶叫して、天火人火、地に革命到るとなせり。人よ、予を以て徒らに世を呪ひ人を咀ふ者となす勿れ。鯨児尺池に入れば、其水必ず溢る。予が胸中の心火、滅せんとして滅せず、其煙出るの路を知らず、乃ち筆舌をかりて反逆の声をなすのみ。寧ろ憐れむべからずや。

九月十三日夜、星黒き焼跡の風に送られて、予は鉄車一路北遊の途につけり。亀田駅にて友と別るれば身はむき苦しき車室の中にありて腰下す席もなし。窓を明けて南天臥牛山を望む、沈として眠るが如く劫初より覚めざるが如し。其籠に連れる万点の火光は予が為めに懐かしき人々の夢を語りて嘯くが如く瞬けり。莊嚴なる夜——歴史以前より変る事なき夜の力は、浩蕩の彼方より迫り来りて予が心を押しぬ、

漸やく一席を得て腰を下し、腕を拱いて瞑目すれば新らしき流離の愁泉の如く湧き来りて涙の味はいとも苦かりき。

翌曉小樽に下車、数刻にして再び車中の人となり、**銭函駅を過ぐれば眼界忽ち変じて、秋雲雨を含める石狩の大平原を眺めぬ。**赤楊の木立を交へたる蘆荻の間より名知らぬ鳥の飛び立ちたるを見て、何とはなく露西亜の田園を行く思ひしぬ。ツルゲネーフが「**獵夫日記**」さてはト翁が「**コサツク**」中の銃獵の章など心に残れる為めなるべし。午後一時少し過ぎて身は既に美しき北の都の人なりき。

**札幌は寔(まこと)に美しき北の都なり。**初めて見たる我が喜びは何にか例へむ。アカシヤの並木を騒がせ、ポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ。札幌は秋風の国なり、木立の市なり。おほらかに静かにして人の香よりは樹の香こそ勝りたれ。大なる田舎町なり、しめやかなる恋の多くありさうなる郷なり、**詩人の住むべき都会**なり。此処に住むべくなりし身の幸を思ひて、予は喜び且つ感謝したり。あはれ万人の命運を司どれる自然の力は、流石に此哀れなる詩人をも捨てざりけらし。

**札幌に似合へるものは、幾層の高楼に非ずして幅広き平屋造りの大建物**なり、自転車に非ずして人力車なり、朝起きの人にあらずして夜遅く寝る人なり、際立ちて見ゆる海老茶袴に非ずして、しとやかなる紫の袴なり。不知、北門新報の校正子、色浅黒く肉落ちて、世辞に拙く眼のみ光れる、よく此札幌の風物と調和するや否や。

(北門新報 明治四十年九月十八日)

## 石川啄木の札幌ゆかり作品

『一握の砂』(一九一〇、東雲堂)より

忘れがたき人人

札幌に

かの秋われの持てゆきし

しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街樾(なみき)にポプラに

秋の風

吹くがかなしと日記(にき)に残れり

しんとして幅廣き街の

秋の夜の

玉蜀黍の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹のいさかひに

初夜過ぎゆきし

札幌の雨

みぞれ降る

石狩の野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

石狩の都の外の

君が家

林檎の花の散りてやあらむ

『悲しき玩具 一握の砂以後』(一九二二、東雲堂)より

石狩の空知郡(こほり)の

牧場のお嫁さんより送り来し

バタかな。



橘智恵子(1889~1922)

札幌の林檎農家・橘仁の家に生まれる。函館

の弥生尋常小学校で啄木と3カ月間同僚。北村謙に嫁ぎ一男五女をもうけたが産褥熱のために33歳で亡くなった。





## 石川啄木略年譜(札幌時代を中心に)

(石川啄木記念像設立期成会編『啄木と札幌』1981年ほか参照)

明治19年(1886)

2月20日、岩手県南岩手郡日戸村(現・盛岡市玉山区日戸)の常光寺に父・一禎、母・カツの長男として誕生。「一」(はじめ)と名付けられる。姉にサダ、トラ。一禎は同寺22世住職。

明治20年(1887) 1歳

3月30日、父・一禎の転住により、洪民の宝徳寺に移る。

明治24年(1891) 5歳

5月2日 学齢より1年早く岩手郡洪民尋常小学校に入学。

明治28年(1895) 9歳

4月2日、盛岡高等小学校に入学。

明治31年(1898) 12歳

4月25日、盛岡中学校に128人中10番目の成績で入学。

明治35年(1902) 16歳

10月、退学届を出して上京。与謝野晶子の新詩社に入ったが、翌年志を得ず帰郷。

明治36年(1903) 17歳

12月1日、『明星』に啄木筆名で詩「愁調」が載る。

明治37年(1904) 18歳

9月から10月にかけて次姉トラ夫妻を小樽に訪ねる。

明治38年(1905) 19歳

4月、一家は宝徳寺を去り盛岡市に転居。5月処女詩集『あこがれ』

刊行。堀合節子と結婚。

明治39年(1906) 20歳

2月、次姉トラ夫妻を函館に訪ねる。4月11日、洪民尋常高等小学校の代用教員となる。12月、長女・京子誕生。

### 【函館時代】

函館日日新聞

明治40年(1907) 21歳

4月、同校退職。5月4日、洪民を離れ函館に向かい、5日函館到着。青柳町に住み、「紅苜蓿」編集に携わる。5月に函館商業会議所臨時雇。6月に弥生尋常小学校の代用教員となり、女教員橘智恵子を識る。8月、函館日日新聞社の遊軍記者を兼ねる。同25日函館大火に遭遇、勤め先を失う。向井永太郎(夷希微)に札幌への就職を依頼。

### 【札幌時代】

北門新報

北門新報

9月13日札幌に向かい、14日、小樽に途中遊下車して姉トラ夫妻の家へ立ち寄り、単身で午後1時札幌に入る。向井の宿である北7条西4丁目中サト方に下宿。

9月15日午後、市中を回り、夜、同郷の小国露堂の厚意で北門新報社長村上祐と会う。

16日から北門新報社に校正係として勤務。

18日の紙面に「北門歌壇」と「秋風記」掲載。

20日、小国より「小樽日報へ乗替の件秘密相談あり」。

21日、妻子が小樽より来て日帰り。

23日、小国の宿（幸栄館・北1西10）で初めて先輩詩人で「北鳴新報」記者の野口雨情と会う。ともに小樽日報社に転ずることとする。

27日、北門新報社を辞して小樽へ。

### 【小樽時代】

小樽日報

北海タイムス

10月2日、花園町に間借りし母と妻子との新生活始まる。15日に「小樽日報」創刊。しばしば札幌に出て北海タイムスなどへの就職を画策。12月12日に小林寅吉に暴力をふるわれて退社を決意。21日の紙面に退社広告を掲げたが、一家の生活は困窮を極める。

### 【釧路時代】

釧路新聞

明治41年（1908）

22歳

1月13日、白石小樽日報社長が経営する釧路新聞社に入社が決定。19日、単身小樽を発ち、岩見沢と旭川に各1泊、21日夜半に釧路に着く。州崎町に下宿を定め、22日に釧路新聞社に出社、編集長格として活躍。この間、芸者小奴と親しむなど生活は華やかであった。3月28日に離釧を決意し、4月5日に酒田丸で釧路を去り、函館・小樽に滞

在の後、家族を宮崎郁雨に托す。

◇◇

4月24日海路上京。5月4日東京本郷区、森川町赤心館に下宿。9月、金田一京助の厚意で下宿を本郷の蓋平館別荘に移す。

東京新聞

明治42年（1909）

23歳

1月1日「スバル」創刊。発行名義人となる。3月1日、東京朝日新聞社校正係に採用され、出社。4月7日、ローマ日記を書き始める。6月、妻子を迎え、住まいを本郷の喜之床2階に移す。10月、節子、義母との確執から京子を連れて盛岡の一時実家に帰る。

明治43年（1910）

24歳

6月の幸徳事件で政治社会的に大きく開眼。10月4日長男・真一誕生するが生後24日目に永眠。12月1日第一歌集『一握の砂』刊行。

明治44年（1911）

25歳

2月に慢性腹膜炎で東大病院に入院し、翌月退院したが、すでに肺を冒され病状悪化の一途をたどる。8月、小石川区久堅町へ転居。

明治45年（1912）

26歳

3月7日、母・カツ永眠。4月13日午前9時30分、父・一禎、妻・節子、若山牧水に看取られて、啄木永眠。6月20日歌集『悲しき玩具』刊行。

大正2年（1913）

5月5日、妻・節子永眠

（新聞題字の一部は池田功のリーフ「啄木の軌跡」より転載）